

004 TICA

題名	作者	コメント	コメコメ
死神の精度 (文芸春秋)	伊坂幸太郎	死ぬ運命の人間に近づき、死の最終的な判断をし見届けるまでが仕事の死神「千葉」。「千葉」が関わる6人の生き死にを姿を変えて近づき見つめる。人間の日常にあまり詳しくない死神のはずれた会話を読むと、この人は笑いのセンスがある人なんだろうなって思う。最後の章が、それまでの登場人物の未来になっているところが好き。	シュクコちゃんが紹介してくれた作家さん。いつも新しい風をありがとう。私は嬉しい。
魔王 (講談社)	〃	この話でも「千葉」が接近してくるが、軽く読めた『死神』とは違い、大きなものに流される人たちの波を食い止めようとする不思議な力を持ってしまった兄と、兄の死後意志を継ぐ弟。話のポイントになっている宮沢賢治の詩の激しさは意外だった。	弟クンが苦手なごきぶりのことを「せせらぎ」って呼ぶのが可愛い。
重力ピエロ (新潮社)	〃	連続放火事件の現場に残された謎のグラフィティアート。無意味な言葉の羅列に見える英語から隠されたメッセージをさぐる兄弟とその父親。悲惨な出来事に負けなかった家族の暮らしを思い出しながら3人は同じところに向かう。ヒーローのお父さんに浜省の『I am a father』を贈ります。	3冊続けて読んだ伊坂幸太郎の中では『死神』が一番好き。
北緯 四十三度の 神話 (文芸春秋)	浅倉卓弥	今度は姉妹の再生の物語。『四日間の奇蹟』と同じに、事故がひとつぽんとあってそれ以降は激しい感情も静かに書かれている。『四日間』は好きだけど、これは残念ながら面白くなかった。ご存知かもしれないが私にも姉がいる。この話の姉妹みたいに同じ人を好きになる事はぜーったいにないから、その辺の問題は我が姉妹では起きないのがつまんない。	姉とは年が離れていて、姉の結婚も早かったから私がオトナになったときに一緒に遊ぶ時間がなかったのが惜しまれる。
I LOVE YOU (祥伝社)		伊坂幸太郎、石田衣良、市川拓司、中田永一、中村航の今をときめく若手(多分)の6人が紡ぐ恋愛アンソロジー。どれも透明感がある話で、印象に残りにくい。	青春の恋愛ってこんなに綺麗だったっけ？
その日の まえに (文芸春秋)	重松清	これもシュクコちゃんが貸してくれた。直木賞受賞作家として名前は知ってたけど、読むとは思ってなかった。本の帯に『涙！涙！！涙！！今年のベスト1』という松田哲夫の言葉が。松田哲夫は以前雫井脩介のことを誉めていたからちょっと信頼してたし、泣ける本というので読むのが楽しみだった。でもちょっと「！」の多さに胡散臭さを感じ、泣かせようって手法に醒めてしまうかなって思いもあ	『死神の精度』のようにこれも7編目の話にそれまで闘病していた人が少しずつ関わりを持ちその後の消息がわかる。

		った。で、どうだったかという、泣いた。母と暮らす高校生の男の子の話に泣いた。最後の話でまたその高校生が出てくるところで泣いた。将来家を出ることはあっても親が死んで一人取り残されるなんて思いもしない高校生の息子。優しい言葉をかけるには繊細すぎて乱暴な言葉遣いで思いやる。お母さんは解かっているからそれでいいんだけどね。	
セリヌンティウスの舟 (光文社)	石持浅海	九死に一生を得て連帯感を持ったダイバーたちの一人が自殺をした。残りの仲間との関係をメロスとセリヌンティウスに準えてその原因を推理していく。本屋さんを何箇所か周ってもこの人の代表作は売り切れだったから仕方なくこれを買って読み始めたら探していた本を見つけたけど、それも無駄だったかと思えてしまった本。	仲間のおうちで自殺しちゃうってのはいくら信頼してる仲間同士でも迷惑以外のなにものでもないと思う。
扉は閉ざされたまま (祥伝社)	〃	友人が集まった豪邸で行われた密室殺人。扉を壊す事が出来ないと言う設定と、最後の展開に意外性はあったけど、肝心の動機が弱すぎる。こんなんでも殺しちゃうかあ？	今度は友人所有のホテルで殺人を犯しちゃう。だからさ、迷惑だつーの！
砂漠の薔薇 (幻冬舎)	新藤冬樹	何年か前に国立の幼稚園入園の際に起こった『お受験殺人』をモチーフに、殺してしまった母親の子供時代を絡ませる。小さい頃から同じ学校で過ごした母親同士には上下関係があり、それがそのまま子供にもつながっていく。 前時代的な母親関係じゃないかって思ってしまうのは自分があまりにも違うタイプだからか、作者が男だからか。鬱陶しい人間関係の鬱陶しい話、と身も蓋もない言葉を吐きつつ斜め読みしちゃった。	以前住んでいた所は公立より私立の小学校の方が近いという環境もあって、小学校受験が花盛りだった。でもうちは子供より親が小学校受験に向いてなかったもんね。
パーフェクトプラン (宝島社)	柳原慧	『四日間の奇蹟』について第二回の『このミス』大賞受賞作。読んでいて作者は男だと思っていた。 “身代金ゼロ、せしめる金は5億円、誰も傷つけない誘拐ミステリー”。幼児虐待、オンライントレード、ES細胞、美容整形、代理母、ハッキング・・・現代のキーワードがこれでもかと詰め込んであって窮屈。代理母や、誘拐の首謀者の親子関係など心情的な話を中心になっていた方が好み。最初から登場していた犯人ではあるけれど、その存在も逮捕の道筋にも唐突感がある。	ベルフェゴール、エニグマ、サヴァン症候群など聞き慣れない言葉が山盛り。トムクルーズが、文字を覚えたり書いたりすることに障害が出るディレクシアっていうのにはびっくり。

